

2020年2月27日

主査 宮原 哲

副査 オルソン、D. L.

清宮 徹

博士号学位申請論文審査報告

志岐 早苗

「過去」を基点とした恋愛関係と恋愛観の

コミュニケーション学視点からの考察

(A Research Study on Perceptions of Love from the Perspectives of Communication Studies:
Focus on Romantic Relationships and Love Perceptions Based on Past Relationships)

【研究の背景と概要】

志岐早苗は2013年度に提出した修士論文、「日本人男女の恋愛関係における『修復』のコミュニケーションについて」を執筆以前から一貫して日本人の恋愛について強い関心を抱き続け、今回の博士論文へと繋いだ。日本でのコミュニケーション学の視点からの恋愛についての研究は数が少ないが、このことは単に恋愛に関心を注ぐ研究者が少ない、あるいは研究課題として恋愛が「人気」がないといった表面的な理由からではなく、「自己」、「人間関係」、「恋愛」との相互の存在論的、あるいは認識論的關係が、その方面での研究が進んでいる欧米とでは根本的な部分で異なっているからなのかもしれない。この考え方は、単なる方法論やデータの分析法などといった表層の問題ではなく、日本のコミュニケーション学の研究の根本部分の問題として取り上げるべきなのかもしれない。修士レベルでは恋愛関係が不幸な形で終息した後の当事者の行動という、言ってみれば狭い、部分的な側面に焦点を絞ったのに対して、今回の研究では欧米主導のコミュニケーション理論や概念がそのままでは日本人の恋愛を説明するのに不十分、かつ不都合、不適であり、したがって日本社会のさまざまな特色にも光を当てつつ日本人の恋愛観について研究、調査を行うことによって、日本的コミュニケーション理論の構築に少しでも近づきたいという意欲が見られる論文となっている。

若者（定義は明確ではないものの、従来から恋愛に強い関心を持つとされてきた世代）による「恋愛離れ」が深刻化してきているといわれている。またストーキング、デートDVといった恋愛にかかわる社会事象が質、頻度ともに近年目立つようになってきたのも日本での

特徴の一つである。「型」を重んじる日本社会では恋愛をしない、できない人、またしたとしてもこれらの問題を抱えて恋愛関係を終えた人などが「問題を持つ人」という烙印を押されることも恋愛に対して強い拒絶反応を示す人が増えることの一因となっている。思い切った恋愛関係を望んだり、行動に出たりといったことに対して二の足を踏む若者が多くなっていることも日本の特徴である。

恋愛に躊躇する原因の一つとして、欧米の理論を借りると **Relational Baggage**（人間関係、特に恋愛関係に持ち込む「荷物」）という概念を挙げることができる。自分自身が過去の人間関係そのもの、あるいはその周辺で味わった出来事、さらには相手のそれまでの生活にともなう、たとえば解雇された、借金があった・ある、をどのように認識するか、その認識が今の関係にどのように影響を与えていると考えるか、ということが恋愛関係を始めたり、維持したり、発展させたりといった「関係に対する認識」に大きな影響を及ぼすことは容易に想像できる。

日本人の恋愛観（恋愛に限らず、すべての人間関係）に与えるもう一つの観念が自己観である。**Hofstede** や **Triandis** といった欧米の研究者が明らかにした、集団主義志向と個人主義志向という概念が文化レベルであるのに対して、個人レベルで自己をどのようにとらえるか、という疑問に取り組み、その後多くのコミュニケーション学、社会学、心理学などでの研究の礎を築いたとされる **Markus & Kitayama** による独立的自己観（**independent self-construal**）と共依存的自己観（**interdependent self-construal**）は多くの人たちの対人関係に対する態度、姿勢に大きな影響を与えていると考えられる。前者は「自己」が一人ひとりの個人の内側にあり、そのような人たちが相互に関係を築くが、内側の自己は常に「核」として存在し、相手や状況によってある程度調整することはあっても場面ごとに大きく変わることはない想定する。一方、共依存的自己観が強い人は、自己は他者との関係によって初めて規定されると考えるために、自分が人からどのように見られているのか、周囲から否定されないためにはどうすればいいか、といったことを常に重視しているという。このように相反する自己観の下では、当然恋愛に対する考え方も行動も異なることが容易に想像できる。

これらの研究背景の中で志岐早苗は今回の博士論文を執筆した。第一章で日本人のコミュニケーション行動、特に恋愛に関する研究の概要を示して論文全体の基礎を形成している。第二章では欧米で行われてきた恋愛研究の主なものを紹介し、第三章でその中でも「恋愛は常に変化する」という考えの下で形成された **Relational Dialectics** という代表的な研究、さらに 1960 年台に日本で注目を浴びた中根千枝の「たて社会の人間関係」を引き合いに出して最初の疑問点、「どのようなことが恋愛関係を維持する動機として認識されているか」に到達している。続く第四章では恋愛関係に影響を与える要因として先述の「荷物」の概念を紹介、解釈した結果、二つ目の研究課題、「過去の経験が現在の恋愛関係や恋愛観にどう影響していると認識されているか」を導き出した。第五章は二つ目の疑問をさらに発展させ「恋愛関係は何をきっかけに、そしてどのように変化すると認識されているのか」という疑問を提示している。論文は第六章の研究方法、第七章の結果、第八章で結果が示すことのみまとめ、第九章での考察と続き、第十章での研究課題と今後の展望で終わっている。

【本研究の評価】

本論文は志岐早苗が長年抱き続けた研究関心事項である「恋愛」についてである分、これまでに収集した文献の量と、また常に最前線の研究結果を探求したいという意欲によって可能になった質の担保は高く評価することができる。そのままでは適用できない、ということ的前提にしつつ欧米の研究者がこれまでに提示してきた対人コミュニケーション全般に関する研究、自己観関連、関係の変化のメカニズムを明らかにしようとした有名な **Relational Dialectics Theory** などをよく理解し、自分の知識として論文中表現していることも論文の質への向上に貢献している。

また、恋愛関係が突然変化する際の様子や特徴を説明しようとする **Relational Turbulence**、そして前述の「荷物」の理論である **Relational Baggage** の概念はこれらの緻密な先行研究調査の結果出会うことができた貴重な理論である。同時に日本人の恋愛の説明をこれらの理論をそのまま当てはめて行うことはできないという、あくまでも「暫定的」姿勢、つまり結論を急がない、不透明なことを不明瞭なこととして受け入れる (**Tolerance of Uncertainty**) の態度も研究者に求められる大切な資質であることを強調しておきたい。研究哲学や研究法の面で自然科学に大いに影響を受けた社会科学の伝統の下では、「正解は一つ」、「A と B との間の因果関係を求めることが目標」、「X と Y との相関関係は何か」といった「科学的」見方と手法に走ることが多いが、今回の研究で志岐は仮説を説明したり、実証的な研究を行ったりという考え方に惑わされずに最後までインタビュー結果と向き合ったことが最も評価するに値する部分である。

インタビューは 26 名 (男性 13、女性 13) の日本人に平均 1 時間を超える半構造型で行い、上記の研究質問に対する答えを構築するための質問を行った。半構造型で行うということは、単に質問をして答えてもらうにとどまらず、インタビューをする側とされる側との間で「意味の協働構築」を試みるという点で近年の質的研究で特に重大な価値が置かれている。ただ、恋愛という、親しい相手にしか語らない内容のインタビューであったことから、26 名のほとんどが志岐の顔見知りや同僚であったことは、インタビューの内容から考えるとある程度やむを得ない事情ではあったかもしれないものの、改善するとすれば、もっと多くの、そして広く募った対象にインタビューをすべきだったという反省点は今後にも生かされるべきであろう。

インタビュー結果は「データの中にこそ理論が埋め込まれている」というグランデッド・セオリー・アプローチ (**GTA**) 「的」考え方に根差した方法として、何度も逐語録を読み返し、そこで得られる地道な、かつ推論的な分析を行った。分析途中で再びインタビュー相手と連絡をして新たな質問を投げかけた、という点は **GTA** の研究哲学と一致した、意欲的なデータ収集と言える。

さらに、先述の自己観の影響を探るべく、これまでに独立・共依存型自己観の度合いを測るために使われてきたアンケートをインタビューから相当時間が経過したのちに 26 名の対象者に行ったことは興味深い。その結果、日本人の多くは共依存型自己観を持っている人が圧倒的に多く、その程度も相当高い、というこれまでの研究結果とは相容れない結果が導き出されたことも特記すべきことで、これは今後新たな研究の可能性を秘めている。高度な統

計処理を行ったわけではないし、自己観と恋愛観との厳密な相関や因果関係を求めた研究ではないので、この点について結論的なことを主張しているわけではない。しかし、論文のこの部分は「別の」研究としても位置付けることのできる独立した探求であり、今後この部分を研究全体でどう位置付けるかが建設的な課題である。

予想された以上に日本人対象者が「独立自己観」を持っていることが判明した半面、恋愛観については独立型自己を持っている人の割には「周囲のことに気を配る」、「相手のことや子どものことを中心に自分の恋愛を形成する」といった、どちらかと言えば共依存型自己観を持っている人に予想される恋愛観を持っていたことは大きな発見である。このこと一つをとって見ても、これまでの欧米主導のコミュニケーション理論や概念、さらには研究方法が日本人のコミュニケーションの特徴を描写、説明したり、予測したりするには不十分、不適切であることが理解できる。独立型・共依存型という二律背反的な自己観に加えて、新たに「両文化型」(bi-cultural)、「周辺化型」(marginal: どちらにも属さない) という自己観のパターンについて、これまでに少数の研究者が関心を抱いてきたが、今後志岐自身がこの方面の研究を推進する一人になることも期待できる。

以上、恋愛に対する認識や行動を通して日本的コミュニケーション理論を構築する、という大きな目標に向かって、当然一度の研究、論文でゴールまで達成することは期待できないものの、その目標に対して小さいかもしれないが確実な一歩を印したことを証明する論文として十分に評価することができる。論文を査読し、これらのことを総合的に評価した結果、本論文は志岐早苗が独立した研究者として今後歩んでいけることを示すに十分なものと評価し、博士号取得に求められる基準を満たしているとの結論にたどり着いた。